

## 美術の窓(83)

奈良国立博物館で東大寺戒壇堂の  
「四天王立像」を観る

大和文華館館長 水田 徹

先月号に引き続き、昨年初夏に奈良国立博物館の特別展で間近に拝観できた東大寺戒壇堂の「四天王立像」について考えてみましょう。問題は東大寺法華堂（三月堂）の「伝日光・月光菩薩立像」と同類・同質の対比の極意が見えてくるか、ということでした。なお今回の展示では「四天王」は横一列に並べられておりましたが、周知のように日頃は戒壇院正堂の戒壇上四隅に、つまり正面から見て手前左右と奥の両角に、四尊像は安置されています。以下の観察もこの本来の配置を念頭に進めて参りますのでご了承下さい。

さてこの四天王立像における対比の妙は、これも夙に指摘されているように実に念入りです。まず四像全体を視野に入れると、前列左右に憤怒を露わにした「増長天」と「持国天」を並べ、後列に（今回の展示では前列二像の両側に）感情を内に込めた渋面の「広目天」「多聞天」を配し、相貌の動・静を列の前後で対照させてあります。また左手前の「増長天」と右奥の「多聞天」はともに右腕を上げ、手前右の「持国天」と左奥の「広目天」は両腕を緩く下ろしています。四像の姿態を対角線上でも照応させたのでしょうか。

前・後列二像づつのポーズも明らかに対照的です。前列では「増長天」と「持国天」がそれぞれ内側の腕を曲げ、外側の足を邪鬼の頭上に置き、一方後列では「広目天」「多聞天」とも外側の腕を垂れ、体重を内側の足に掛け、外側

の足は僅かに開いて邪鬼の尻に載せています。結果的に邪鬼の向きも、前列では頭を外側に、後列は内側に向くという対比と統一が保たれているのです。

四像間の似たような照応関係は同じ東大寺三月堂の乾漆造四天王像にも認められますが、対応の仕方は戒壇堂四天王像の方がしなやか、かつ緊密です。そのことを端的に示すのが四像の眼差しの表現でしょう。壇上四隅に立ち姿態と相貌を二重、三重に対比させつつ、しかし眼だけは揃って我々を凝視します。前列に立つ二王は口を阿吽に開閉させ、やや下目遣いに真近から、後列の二王は口をへに字に結んで眉を寄せ、上目遣いにやや遠方から。眼差しのつくりもまた与って、四像相互の位置関係、観者との距離を明示しているのです。まこと見事な群像表現という外ありません。

遡って飛鳥時代の仏像や尊像には、観者との距離を意識させる造形は見当たりません。法隆寺金堂の釈迦三尊も夢殿の救世観音も、像容、顔の造作とも完全に正面観であり、これに呼応して衣の襞も真横ないし真向かいにしか流れず、我々には尊像との距離を量る術がありません。法隆寺金堂の四天王像もほぼ同様です。四天王とも邪鬼を含め真正面向きに構え、天衣の裾も前方にしか翻らず、観者との距離はもとより、尊像間のつながりも定かではありません。飛鳥時代人にとって、仏や護法神はなお人智を越えた超絶の存在だったの

でしょうか。

これに比べ戒壇堂四天王像は手足の動作から顔の造作に到るまですべてが対比的に、つまり一つの視点から総合的に捉えてあり、そこに我々は作者の視線、等身大の人智の働きを感じます。同様のことは法華堂の「伝日光・月光像」にも当てはまります。先月号でも見たように、この二像の間にも姿態と眼差しのつくりで微妙な差が認められ、そこに我々は両尊像に込められた意味合いの違い、年齢差を読み取ることができました。群像を一つの視点から集約的に捉えようとする、戒壇堂四天王像の場合と同質・同根の人智が働いている、と申すことが出来ましょう。

この二つの群像とも当初の安置堂宇は不明です。しかし近年の日本彫刻史学は、仕上げ土の青みを帯びた白色の質感と着色模様のパターンの一致を根拠に、この両群像を同一工房によるほぼ同時期の作と想定します。群像表現のあり方の一致という点でも、この説は十分に首肯できると思われま

す。最後に戒壇堂四天王立像における彫刻のつくりの四像間の異同を確認しておきましょう。前述のようにこの群像には極めて入念に計算された対比の原則が貫かれており、そこに我々は一人の仏師の卓越した構成力を想定することができました。しかし実地の施工には

協力者が加わっていた可能性も否定できません。現にこの四像の間には胸甲中央部の菊花文の有無、甲締具の型式といった防具細部のつくりにおける異同が認められ、また胸元に覗く下衣と髻を束ねる三角帯のそれぞれに、縦の折り目が彫り出されているか否かといった造形上の差異も迎えます。

しかし最も注目すべきは、身体の骨格の組み上げ方の違いでしょう。壇上右側に立つ「持国天」「多聞天」の二体は、胸郭と腰がおおよそ水平を保ち、身体の中中線はこれらと直角に交わりつつ、ほぼ垂直に走っています。一方左側の「増長天」は右腕を上げた姿勢に依じて胸郭は大きく傾斜し、中中線はS字状の回転を見せます。同じく左側に立つ「広目天」も両腕下ろした姿にも拘わらず、腰の張り出しに呼応して胸郭は軽く立脚側に傾斜し、身体の中中線も下腹部でわずかに、しかしはっきりと湾曲しています。総じて左側の二体は、支脚と遊脚を区別し、首と腰で身体を屈曲させる、中国伝来のいわゆる「三曲法」の立像形式をより正確に理解し、自家築籠中の物とした作者の手になるものといえま

広目天



増長天



持国天



多聞天



季刊 美のたより No.141

平成15年 1月 5日

発行 大和文華館